

# 「有段口縁」の粗製土器の検討

## —諏訪木遺跡と古宮遺跡を中心として—

鈴木 佑太郎

**要旨** 本稿では、「有段口縁」の粗製土器の成立と変遷過程から地域様相の解明と土器製作者を導くことを目的とした。「有段口縁」の粗製土器は、縄文時代晩期中葉の天神原式土器併行の粗製土器とされ、従来から報告書内の分類に留まることが多く、成立や変遷について詳細に言及しているものは少ないことから、多くの課題があると考えた。そこで諏訪木遺跡や古宮遺跡を中心として時間的変遷の検討を行い、類型化を試みた上で、群馬県と埼玉県において分析を行った。その結果、「有段口縁」の粗製土器は、安行 3a 式期には妻沼低地から大宮台地北部を中心として成立し、安行 3b 式期には現利根川以南に分布がとどまり、安行 3c 式期にかけて、群馬県域などへの分布範囲の拡大や一部地域における変容化が起こることが明らかになった。

### はじめに

粗製土器は、山内清男によって最も日常的な土器で、なおかつ地域的な特色を持つ土器とされ(山内 1964)、大塚達朗によって「土器製作時の基本単位」と位置づけられた(大塚 2000)。私は、この考え方に則り、最も日常的で、なおかつ地域的な特色を持つ粗製土器から土器製作者について捉えるための基礎作業として、「有段口縁」の粗製土器の検討を試みた。

「有段口縁」の粗製土器は、縄文時代晩期中葉の北関東に分布する天神原式土器併行の粗製土器だとされているが、今日まであまり扱われてこなかったのが現状である。近年では、埼玉県諏訪木遺跡や同県古宮遺跡において、比較的まとまった資料が出土しており、そこで私は「有段口縁」の粗製土器の変遷及び様相についての検討を行った。

本稿では、まず「有段口縁」の粗製土器の定義の確認を行ったうえで、観察項目を設けた。次に諏訪木遺跡および古宮遺跡出土の「有段口縁」の粗製土器を中心として変遷と分布傾向の検討を行い、「有段口縁」の粗製土器の展開とその要因の解明を試みた。

### 1. 「有段口縁」の粗製土器の研究史

初めて「有段口縁」の粗製土器について触れたのは、1950 年に近藤義郎が報告した千網谷戸遺跡の報文である(近藤 1950)。近藤は、報文中で出土した粗製土器について「口縁部にそれと並行して隆帯が附されてゐるもの」(近藤 1950 37 頁 9 行)と扱った。

1961 年には、藺田芳雄が千網谷戸遺跡の発掘調査によってのちに天神原式と呼ばれる「須永式」に伴って「折返し口縁」の粗製土器が多量に出土することを挙げた(藺田 1961a)。

藺田以降の「有段口縁」の粗製土器の名称については、その後「折返し口縁」の土器や紐痕土器、「有段口縁」の土器などと様々な不統一な呼称がなされてきた。2004 年に林克彦は、有段口縁土器という名称へ統一を行った(林 2003)。

林は、天神原遺跡の出土資料の中で、従来呼ばれている「折り返し口縁」の粗製土器の粘土紐を外側へ盛り上げるという特徴に着目し、「有段口縁」の粗製土器と、従来の名称を踏まえたうえで、呼称した。

「有段口縁」の粗製土器の変遷過程については、共伴事例が少ない点、変化に乏しい点などからあ

まり言及されてこなかったが、1990年代以降、鈴木徳雄と設楽博己などによって扱われてきた。鈴木は、1997年に埼玉県藤塚遺跡の報文中において、口縁部の有段部が肥厚するものから徐々に平坦化する想定を行った(鈴木徳 1997)。

2000年には設楽が、縄文時代晩期における土器の粗雑化を西日本由来とする検討の中で、鈴木と同じ変遷の見解を示し、「有段口縁」の粗製土器の祖型を加曽利B式土器にさかのぼる可能性を指摘した(設楽 2000)。

「有段口縁」の粗製土器の成立については、鈴木正博や鈴木加津子などによって扱われてきた。鈴木加津子は、1989年に正綱遺跡出土の「有段口縁」の粗製土器について、口縁部が肥厚するものから平坦になり、安行3cには折り返し口縁の粗製土器が確立すると指摘した(鈴木加 1989)。

鈴木正博は、2007年に「後谷遺蹟」にみられる窪地文化層の枠組みの中で、「粗製土器様式」の検討を行っている。鈴木は、「後谷遺蹟」で認められた「有段口縁」の粗製土器の様相を古宮遺跡の土器集中との比較を行い、「古宮型粗製土器様式」と名付け、北武蔵地域に安行3c式から定着すると明らかにした(鈴木正 2007)。また鈴木は、「有段口縁」の粗製土器が大宮台地へ浸透する背景として、「網代圧痕文」の定着があるとしている。

猪瀬美奈子は、2004年に北関東における晩期中葉の様相について扱う際、天神原式土器並行の粗製土器として扱った。猪瀬は、安行3a式から「有段口縁」の粗製土器を確認できると増田修の千網谷戸遺跡の知見を踏まえて指摘した(猪瀬 2004)。

「折り返し口縁」の粗製土器の分布範囲については、新屋雅明が1993年に大宮台地の安行3c式土器の検討に際して、折り返し口縁の粗製土器が群馬県から東京湾西岸に分布し、大宮台地に出土割合が高い傾向にあると述べた(新屋 1993)。

以上従来までの研究史では、名称の問題、成立過程、分布範囲を中心に述べられてきた。名称については、林の「有段口縁」の粗製土器という用語を用いる。成立過程については、口縁部断面形態が肥厚するものから平坦になり、安行3c式期に成立するとされている。しかし従来までの研究史では、「有段口縁」の粗製土器の明確な変遷過程は示されていないため、新屋が示した分布範囲の検証とともに明らかにする。

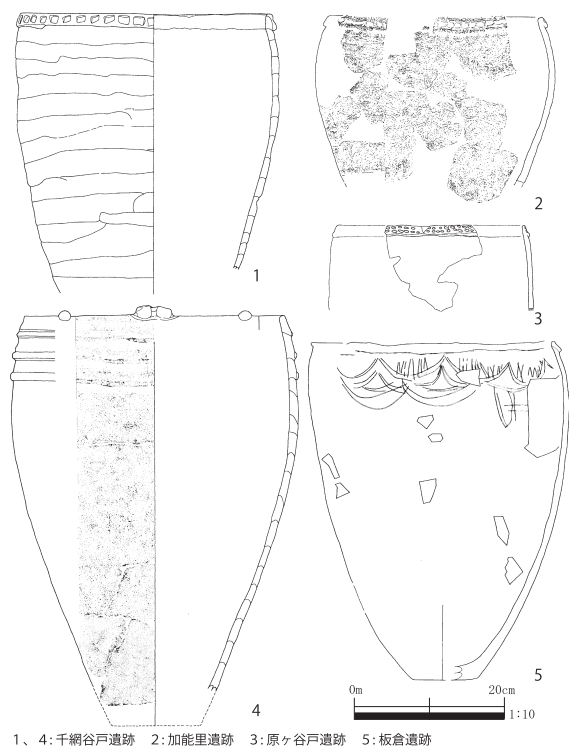
本稿では、「有段口縁」の粗製土器の変遷図から類型を設定し、時間軸とともに分布傾向の把握を行い、「有段口縁」の粗製土器の成立と展開について考えていく。

## 2. 「有段口縁」の粗製土器の名称及び観察項目の設定

「有段口縁」の粗製土器の名称については、土器製作時、口縁部の粘土紐を有段状に外反させて輪積みを行うことが確認できた(註1)。そのことから本稿では、「有段口縁」の粗製土器という用語を用いる。

「有段口縁」の粗製土器の特徴は、古宮遺跡出土土器(第3図—7)を挙げると、精製土器に比べて非常に大型で、薄手のものが多くを占める。器形は、内彎するものが中心であるが(第1図—4)、外反するものも少数みられる(第13図—1、2)。調整方法は、同時期の紐線文系土器と同じく、内面を強くケズリ調整がみられる。この点については、設楽が述べているように紐線文土器との関連性が推測される(設楽 2000)。また胎土は、砂粒に富む。

「有段口縁」の粗製土器の観察項目については、「口縁部」、「口縁部断面形態」、「胴部調整」の3要素の観察を行った。「口縁部」は、有段部の段数及び形態について観察を行った。有段部には1段(第1図—5)、あるいは1段以上(第1図—4)がみられる。



1、4: 千網谷戸遺跡 2: 加能里遺跡 3: 原ヶ谷戸遺跡 5: 板倉遺跡

第1図 「有段口縁」の粗製土器装飾事例(1/10)

また有段部には、方形状工具による刺突などが施されるもの(第1図—1~3)、突起などの装飾がなされるもの(第1図—2)、胴部に文様が施文されるもの(第1図—5)などの施文が確認できた。有段に方形状工具がある土器に関しては、紐線文土器との共通性がみられ、関係性が推測できるが(註2)、本稿では装飾および施文の有無については、扱わない。

「口縁部断面形態」は、研究史上で触れたように肥厚するものから平坦へと変化するとされている。本稿では、断面図で折り返し表現が認められるものを対象として、口縁部の肥厚および折り返し度合の観察を行った。

「胴部調整」は、撫で調整および方向について観察を行った。その結果「有段口縁」の粗製土器の基本的な調整方向は、胴部上半を横方向の撫で調整方向、胴部下半を縦方向の撫で調整方向の土器(第4図—7)から胴部全面を縦または斜め方向の撫で調整が胴部全面に認められる土器(第4図—8)へと変化することが明らかになった。調

整法の変化については、次章で触れる。

以上のように本稿では、「有段口縁」の粗製土器という用語を用い、口縁部に折り返し、および肥厚が認められる深鉢形土器を扱った。そして観察項目は、特徴が認められた「口縁部」「口縁部断面形態」「胴部調整」に観察を行った。

### 3. 出土資料の例示と類型設定

本章では、「有段口縁」の粗製土器が比較的まとまりが認められた諏訪木遺跡D区第1号住居跡、D区第2号住居跡、F区第1号土器埋設遺構と古宮遺跡B区土器集中、古宮遺跡C区土器集中の概観と「有段口縁」の粗製土器の様相を提示した。

次に諏訪木遺跡と古宮遺跡の「有段口縁」の粗製土器を共伴遺物に則って、時間軸上におき変遷案を提示した。そして観察項目をもとに特徴を見出し、類型を設定した。粗製土器集成図に提示した精製土器は、遺構の時間軸の指標として扱っており、詳細な説明は省略した。

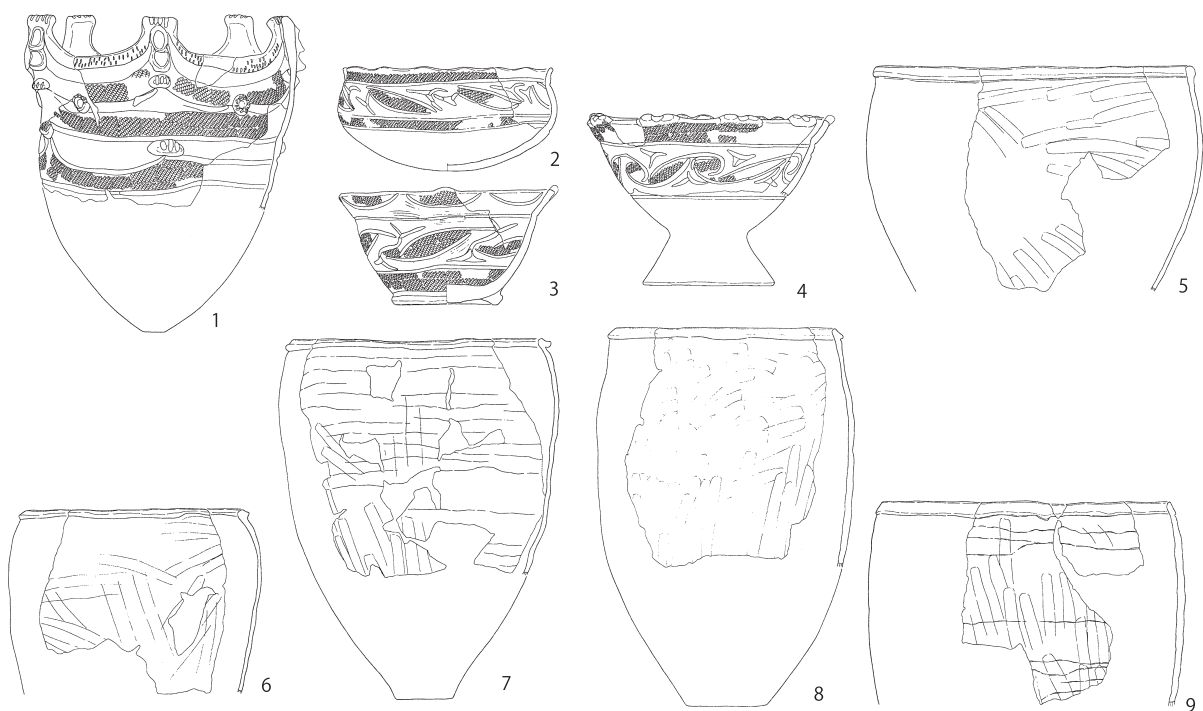
#### (1) 出土資料の提示

諏訪木遺跡は、埼玉県熊谷市東部に所在し、熊谷新扇状地帯末端部に位置する縄文時代後期末葉から晩期中葉を主体とする集落跡である。(渡辺2007)。古宮遺跡は、埼玉県熊谷市に所在し、諏訪木遺跡の北側の妻沼低地の自然堤防上に位置する縄文時代晩期中葉の土器集中が2地点で検出された(鈴木2004)。

#### ① 諏訪木遺跡D区第1号住居跡(第2図—1~9)

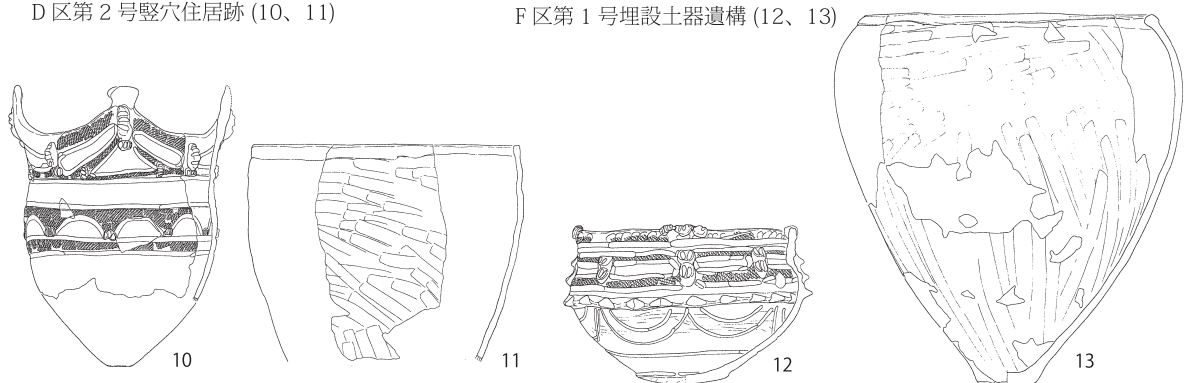
諏訪木遺跡D区第1号住居跡は、SJ1A→SJ1Bという新旧関係が認められる。住居跡の時期は、縄文時代晩期前葉の安行3a式新段階から安行3b式期に帰属する。第2図—2から4は安行3a式新段階、1は安行3b式の精製土器である。3から5の入組三叉文の文様については、文様構成や施文手順などから共通性が認められ、同文様

諏訪木遺跡 (1~13)  
D 区第 1 号竪穴住居跡 (1~9)



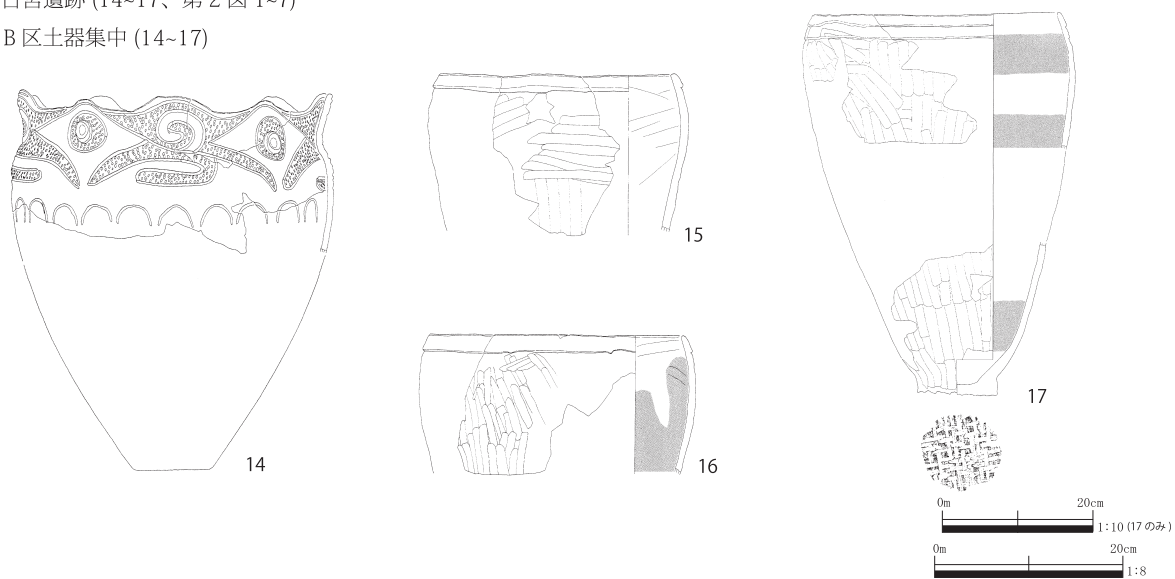
D 区第 2 号竪穴住居跡 (10、11)

F 区第 1 号埋設土器遺構 (12、13)



古宮遺跡 (14~17、第 2 図 1~7)

B 区土器集中 (14~17)



第 2 図 「有段口縁」粗製土器集成図① (1/8、17 のみ、1/10)

C区土器集中(1~7)



第3図 「有段口縁」粗製土器集成図②(1/8)

の変遷過程が想定される。

一方で「有段口縁」の粗製土器は、第2図—5から9を挙げた。9の口縁部は、1段の有段が設けられているが、5から9はまだ有段部へと変化する途上と考えられる。

本住居跡出土の「有段口縁」の粗製土器変遷には、口縁部断面形態に特徴が認められる。5は外側に口縁部が肥厚するもの、6は5と同じく口縁部が肥厚するが、つまみ状の突出がみられ、7ではさらに外側へつまみ状の突出が張り出している。8では外側への突出が内側へ折り返しが認められるが、肥厚が残る。9は、折り返し部が平坦になっている。調整について5と6は、口縁部上

半が横方向の撫で調整、胴部下半は斜め方向の撫で調整が行われ、7と8は斜め方向の撫で調整がなされ、9は縦方向の撫で調整が行われている。

## ② 諏訪木遺跡D区2号住居跡(第2図—10～11)

諏訪木遺跡D区2号住居跡は、安行3a式新段階に帰属する。第2図—10は、安行3a式新段階に相当する大波状口縁深鉢で、三角形区画の帯縄文の度合いがやや崩れている。

11は、共伴遺物から安行3a式新段階と考えられる。口縁部の有段部は未発達で、口縁部断面形態は肥厚していないが、口縁部の様相などから「有段口縁」粗製土器として扱った。器面調整は

胴部上半に横方向の撫で調整、胴部下半に縦方向の撫で調整が行われている。

### ③ 諏訪木遺跡 F 区第 1 号土器埋設遺構 (第 2 図—12、13)

諏訪木遺跡 F 区土器埋設遺構では、安行 3b 式に並行する第 2 図—12 が逆位で埋置され、周囲を 13 で被覆した状態で検出されたことから同時期だと考えられる。内彎した器形で、有段部は未発達であるが、口縁部断面形態は肥厚している。器面調整は胴部上半を横方向の撫で調整、胴部下半を縦方向の撫で調整される。

### ④ 古宮遺跡 B 区集中 (第 2 図—14～17)

古宮遺跡 B 区集中は、安行 3b 式土器もみられるが、天神原式、安行 3c 式に帰属する土器集中である。14 は、天神原式新段階に並行する。「有段口縁」の粗製土器は、15 から 17 が挙げられ、有段部が 1 段のもの (15、16) と有段部が 2 段のもの (17) の 2 種類が確認でき、有段部が広くなる傾向がある。有段部が 1 段の 15 は有段部がやや肥厚気味で、器面調整は胴部上半を横方向の撫で調整、胴部下半を縦方向の撫で調整が行われている。16 は、有段部が平坦で、器面調整は胴部に縦方向の撫で調整のみが認められ、両者には調整などの点で、差異が認められる。また 20 は、有段部が平坦で、胴部を縦方向の撫で調整のみで調整されている。

### ⑤ 古宮遺跡 C 区集中 (第 3 図—1～7)

古宮遺跡 C 区集中は、天神原式、安行 3c 式から安行 3d 式並行に帰属する。第 3 図—1 と 2 は、安行 3c 式並行で、1 は「裏慈恩寺 3 式」(鈴木加・正 1983) と呼ばれるものである。3 は安行 3d 式に並行する鋸歯状入組区画の精製土器である。

「有段口縁」の粗製土器については、4 から 7 を挙げた。出土資料には、先の古宮遺跡 B 区集中のように有段部が 1 段のもの (4～6)、2 段のもの (7) がみられる。どちらの形態とも口縁部断面形態は肥厚している。器面調整について 7 は、

胴部を横方向の撫で調整から下半を縦方向の撫で調整へと切り替えている。

一方で 1 段の「有段口縁」の粗製土器については、胴部上半を横方向の撫で調整、下半を縦方向の撫で調整する 5 と胴部を縦方向の撫で調整する 4 と 7 の 2 種類が確認される。

### (2) 「有段口縁」の粗製土器の変遷の提示 (第 4 図)

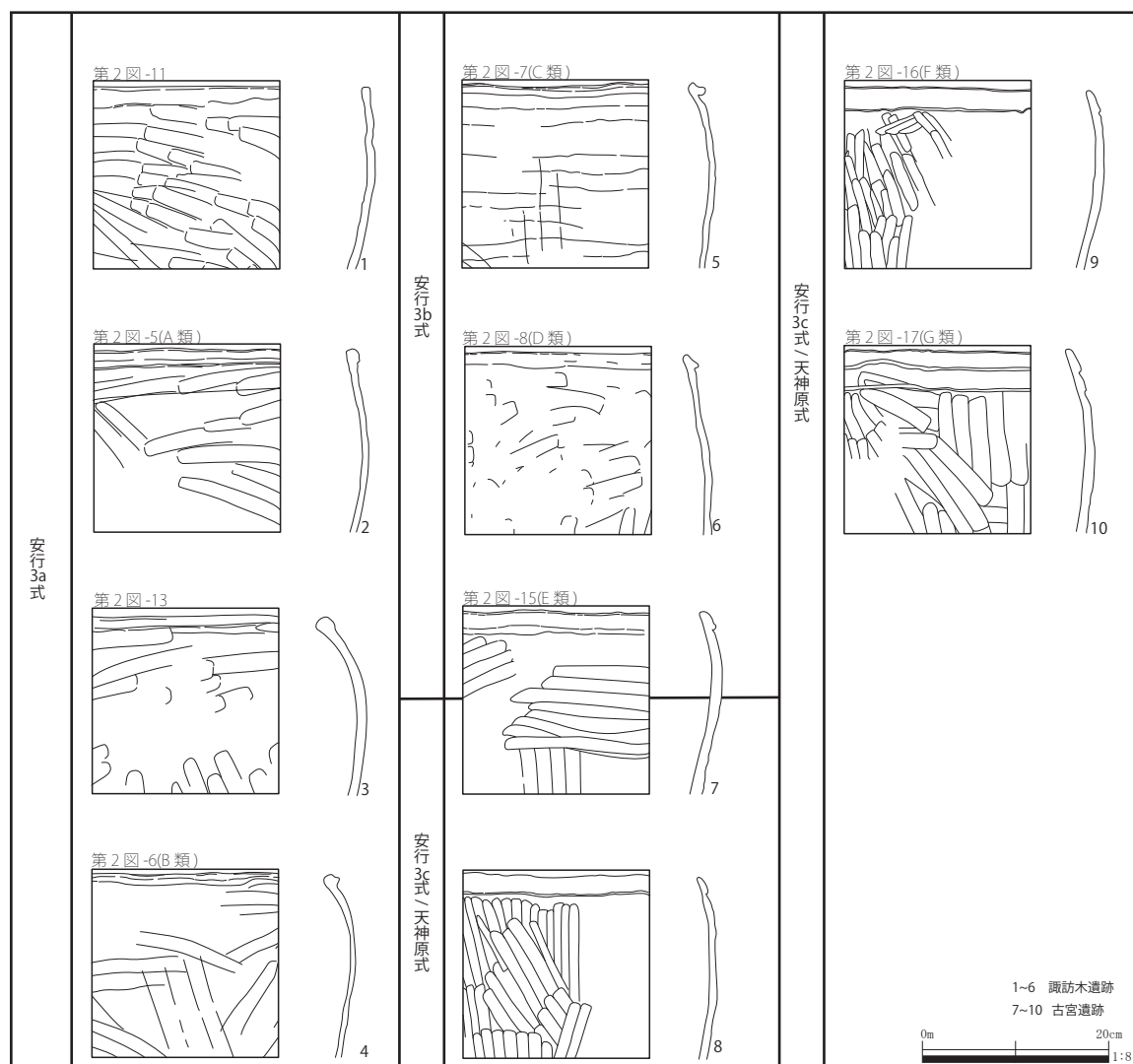
前節では、諏訪木遺跡と古宮遺跡の出土資料の例示を行った。そして、精製土器をもとに時間軸上に並べ、「有段口縁」の粗製土器において時間的変遷を追えることができた。本節では、第 3 図のように安行 3a 式から安行 3c・天神原式までの「有段口縁」の粗製土器の変遷過程を示した。そして模式図の右上には、模式化した本稿の図版番号を示した。

安行 3a 式並行には第 4 図—1 から 4 が想定した。1 は、共伴遺物から安行 3a 式新段階に並行する土器と考えられる。特徴として口縁部は削られ、胴部は大部分を横方向の撫で調整が占めている。器形は直立気味である。口縁部の断面形態は、肥厚が認められない。

2 と 3 は、後述する 4 よりも器形の内彎が弱く、口縁部断面形態の肥厚度合いから、4 の前段階とみられるため、安行 3a 式並行と位置づけた。2 と 3 の特徴は、口縁部の有段部は未発達だが、1 よりも口縁部断面形態が、外側に肥厚し、器形の内彎も 3 になると顕著になる。胴部の調整については、1 では横方向の撫で調整が器面を占める割合が多かったのに対して、3 は、横方向の撫で調整の割合が低くなり、胴部下半には縦方向の撫で調整が明瞭になる。

4 では 3 にみられた外側への肥厚が、若干のつまみ状の突起を有するようになる。これらの特徴から安行 3a 式での変遷は、「1 → 2 → 3 → 4」という時間的変遷が考えられる。

次に安行 3b 式並行の「有段口縁」の粗製土器は、第 4 図—5 から 7 を想定した。口縁部断面形



第4図 「有段口縁」粗製土器変遷模式図 (S=1/8)

態は、5では、4よりもさらにつまみ状の突起が外側に張り出し、羽釜状の形態になる。6はやや折り返され、7になると平坦化が進む。7は共伴遺物から、安行3b式から安行3c式と想定した。

安行3c式並行の「有段口縁」の粗製土器は、第4図—8から10を想定した。8では、7で若干残されていた有段部が扁平化し、有段部の幅が9になると広まる様相が認められた。

また胴部の調整について、7の段階では胴部上半を横方向の撫で調整、胴部下半を縦方向の撫で調整する。一方で8以降は、縦方向の撫で調整のみに変化する。10は、有段が2段のもので、なおかつ有段部の幅が広く、形態などからその成立

以降に生じた可能性がある。

以上のように「有段口縁」の粗製土器は、安行3a式から安行3c式にかけて変遷が認められた。特徴は、口縁部断面形態が肥厚するものから徐々に折り返し、そして平坦化するという変遷が追え、それ以外にも様々な変遷による特徴を捉えることができた。

### (3) 類型の設定 (第5図)

先に提示した「有段口縁」の粗製土器の変遷過については、分布の傾向にどう反映されるのか検討するため、類型化を行った。

類型は、A類からG類を設定した(第5図)。各類型の特徴としてA類は、内彎気味の器形で、

口縁部断面形態は、やや外側への肥厚がみられる。胴部調整は、横方向の撫で調整のみである。

B 類は、器形が内彎で、口縁部断面形態は外側に肥厚し、つまみ状の突出がみられる。胴部調整は A 類が横方向の撫で調整のみであったのに対して、胴部上半を横方向の撫で調整、胴部下半を縦方向の撫で調整されている。

C 類の口縁部断面形態は、つまみ状の突出がさらに張り出す状態になる。D 類は突出部が折り返すものの、肥厚が残っている。E 類は、張り出した突出部が折り返され、有段部となっている。有段部はまだ幅が狭く、肥厚もまだ残っている。

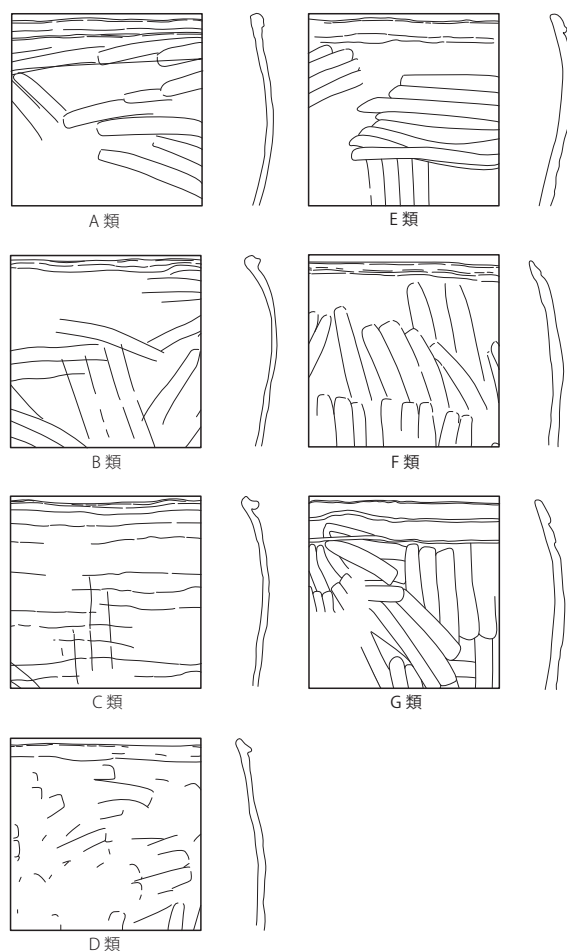
F 類は、有段部は一段で、E 類までの肥厚が平坦になり、有段部の幅も広くなる。胴部調整は、胴部上半を横方向の撫で調整、胴部下半を縦方向の撫で調整から縦方向の撫で調整へと切り替わる。G 類は、有段部が 2 段になり、幅が広く、口縁部断面形態は、平坦になっている。

以上のように本章では、諏訪木遺跡と古宮遺跡の比較的まとまった遺構内出土資料の紹介を行い、「有段口縁」の粗製土器の変遷について提示した。その結果、時間的変遷を追える可能性があることから類型を A 類から G 類まで設定を行った。

#### 4. 群馬県、埼玉県域における類型の分布傾向と各類型の検討

本稿では対象地域として、天神原式が主体的に分布する群馬県と「有段口縁」の粗製土器の分布範囲を探るため、埼玉県域を扱った。抽出方法は、まず「有段口縁」の粗製土器の有無について確認を行い、62 遺跡 1360 点確認することができた(第 6 図)。「有段口縁」の粗製土器の分布は、第 6 図のように利根川流域と大宮台地に中心的な分布がみられる。

次に各類型における分布傾向については、1 遺跡あたりの個体数によって○の大きさを変えて第



第 5 図 「有段口縁」粗製土器の類型模式図

6 図から第 9 図で提示した。そして安行 2 式から安行 3c 式の各時期ごとの「有段口縁」の粗製土器が共伴して出土した一括資料の提示を行い、時間的な位置づけを試みた。

##### ① A 類の分布傾向と検討(第 7 図—①)

A 類は 17 遺跡 50 点の確認ができた。分布傾向は、第 7 図—①のように現利根川以南に遺跡の分布に限られる。特に高井東遺跡や後谷遺跡を中心とする大宮台地北部、諏訪木遺跡を中心とする妻沼低地周辺に分布し、長竹遺跡の所在する埋没台地にも遺跡の分布が認められる。諏訪木遺跡では、D 区第 2 号住居跡で第 2 図—11 が出土した。

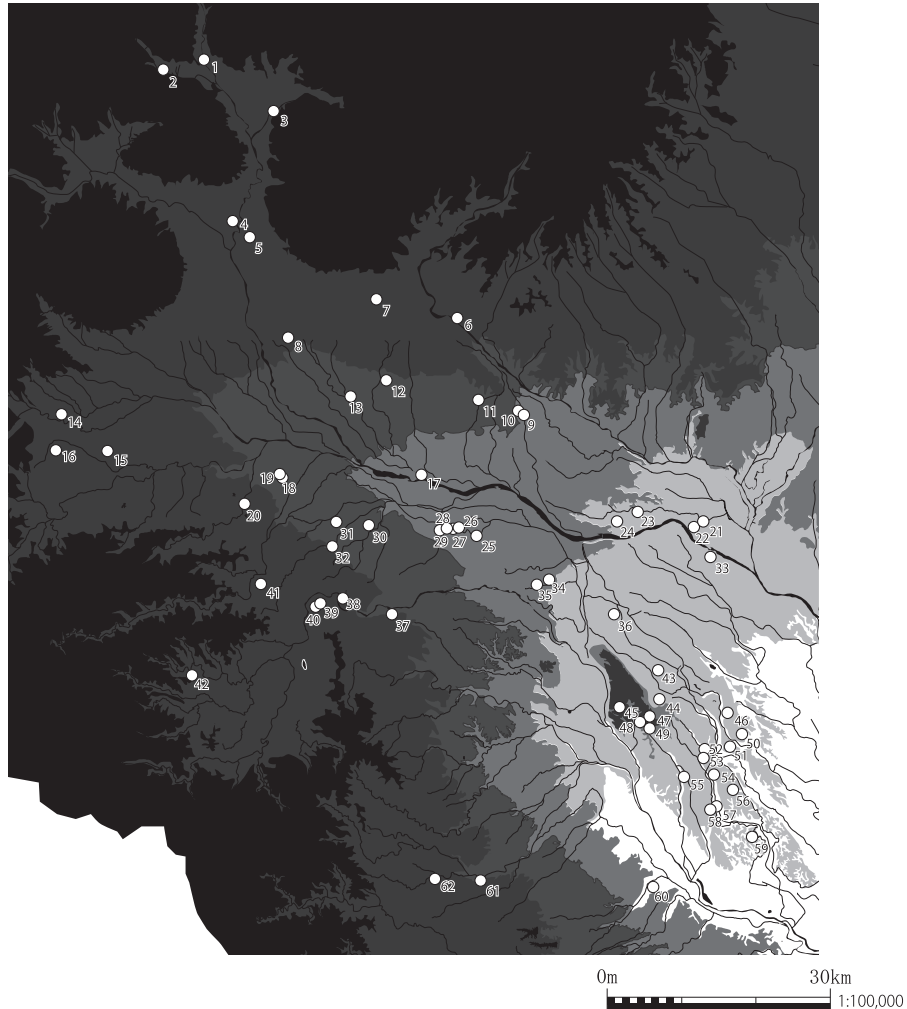
A 類の一括資料は安行 3a 式期に中栗須滝川Ⅱ遺跡を提示した(第 10 図—1～3)。3 は、口縁部の肥厚や口縁部様相などから諏訪木遺跡(第 2 図—5)と類似する。また参考資料として安行

2 式期の高井東遺跡の第 17 号住居跡を提示した (第 10 図—4、5)。5 の胴部の調整については不明であるが、口縁部の形態が諏訪木遺跡と類似しており、「有段口縁」の粗製土器の成立時期が

遡る可能性がある。

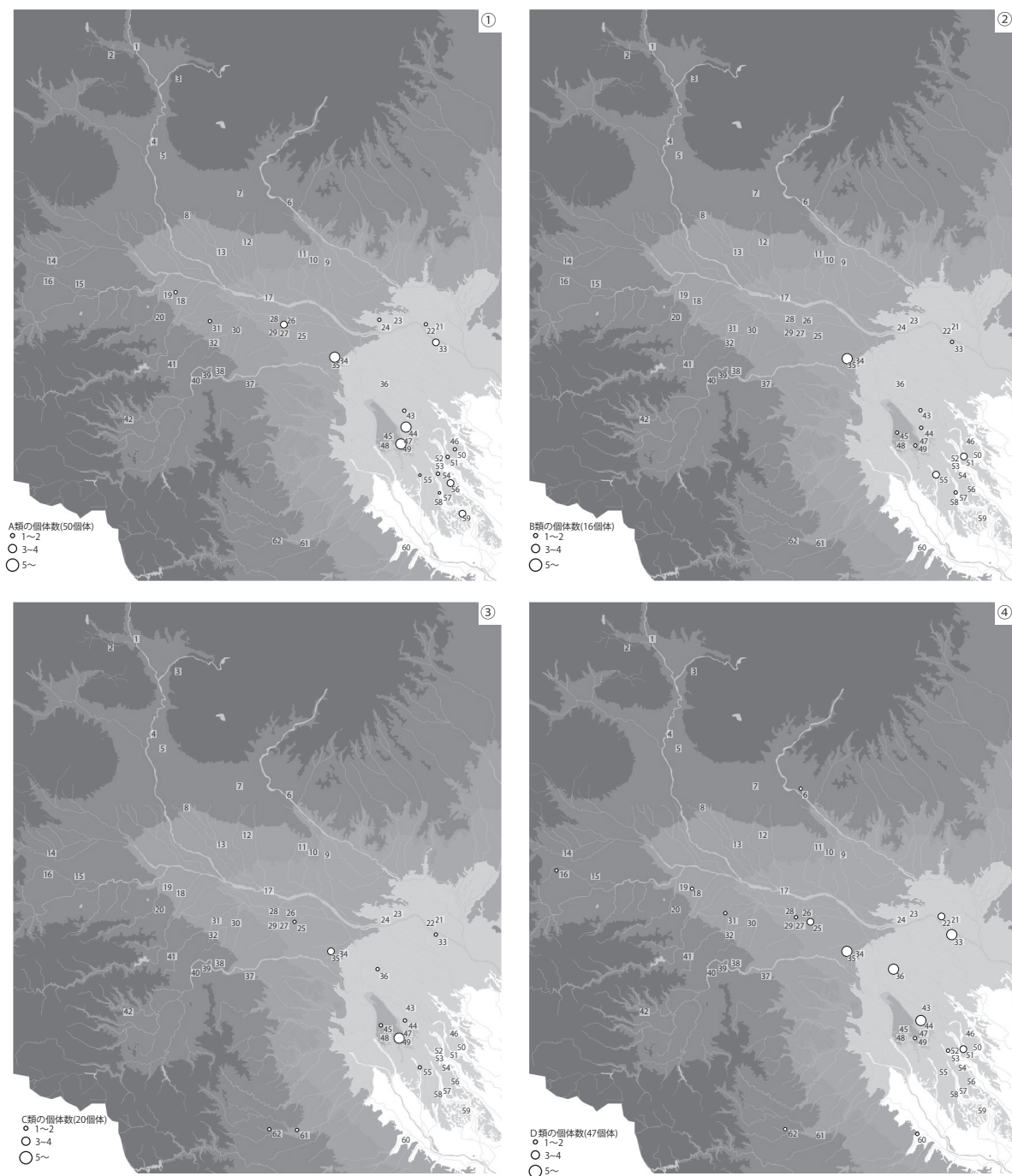
## ② B 類の分布傾向と検討 (第 7 図—②)

B 類は、9 遺跡 16 個体の確認ができた。A 類に比べて確認された遺跡数及び個体数は少ない



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	矢瀬遺跡	17	北米岡遺跡	33	長竹遺跡	49	高井東遺跡
2	新治村役場遺跡	18	谷地遺跡	34	古宮遺跡	50	雅楽谷遺跡
3	糸井太夫遺跡	19	中栗須滝川Ⅱ遺跡	35	諏訪木遺跡	51	久台遺跡
4	吹屋遺跡	20	シモ田遺跡	36	赤城遺跡	52	赤羽・伊奈屋敷遺跡
5	瀧沢石器時代遺跡	21	板倉遺跡	37	橋屋遺跡	53	十二番耕地遺跡
6	千網谷戸遺跡	22	本遺跡	38	樋ノ下遺跡	54	奈良瀬戸遺跡
7	安通・洞遺跡	23	大道原東遺跡	39	大滝遺跡	55	東北原遺跡
8	西新井遺跡	24	矢島遺跡	40	中野遺跡	56	小深作遺跡
9	大道東遺跡	25	原ヶ谷戸遺跡	41	平遺跡	57	寿能泥炭層遺跡
10	楽前遺跡	26	上敷免北遺跡	42	下平遺跡	58	氷川神社遺跡
11	菅塩遺跡群	27	新屋敷東遺跡	43	地獄田遺跡	59	馬場小室山遺跡
12	釜ノ口遺跡	28	上敷免遺跡	44	後谷遺跡	60	正網遺跡
13	荒砥前原遺跡	29	皿沼西遺跡	45	宮岡氷川神社前遺跡	61	中橋場遺跡
14	高梨子森下遺跡	30	古川端遺跡	46	入耕地遺跡	62	加能里遺跡
15	行沢大竹遺跡	31	藤塚遺跡	47	諏訪北Ⅰ遺跡		
16	天神原遺跡	32	児玉清水遺跡	48	大平遺跡		

第 6 図 分析対象遺跡分布図及び番号対照表 (国土地理院地図をもとに作成)



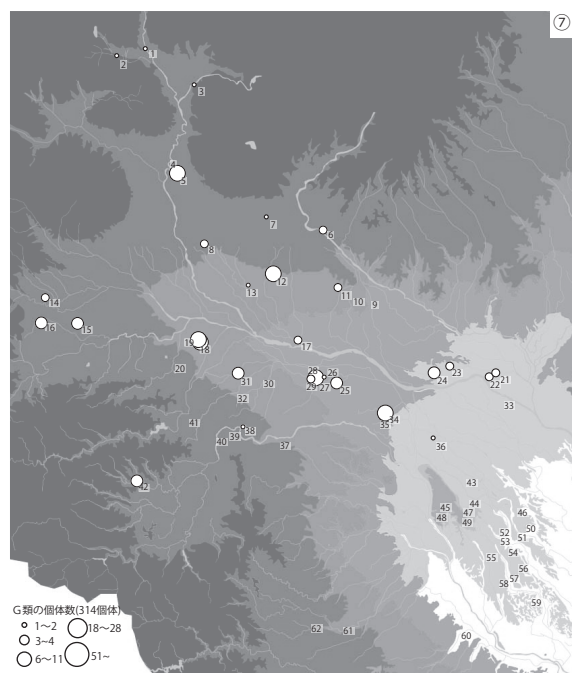
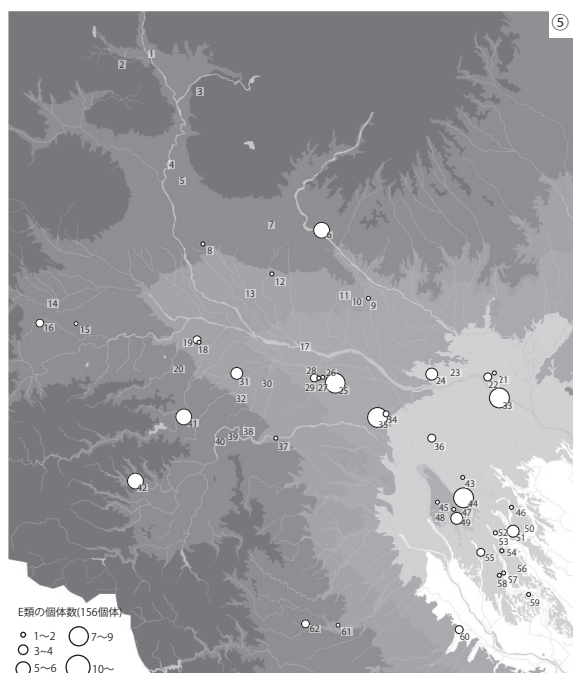
第7図 類型別の出土量比分布図①

が、妻沼低地から大宮台地北部に分布が限られるという特徴がみられる。また傾向としては、A類が確認された遺跡でB類も確認される事例がほとんどを占めている。宮岡氷川神社遺跡では、安行3a式期段階の住居からB類が出土している(第10図—6, 7)。この住居跡からは、安行3a式に比定される紐線文系土器が出土している(第10図—6)。そのため7は、安行3a式期の土器

と思われる。形態は内彎し、口縁部は有段部が未発達で、口縁部断面形態は、外側へ肥厚し、若干つまみ状の突出部が認められる。これらの特徴は、諏訪木遺跡第2図—6との共通性が認められる。

### ③ C類の分布傾向と検討(第7図—③)

C類は、9遺跡20個体の確認ができた。遺跡数はB類と同数であるが、確認できた個体数は、微増傾向にある。分布範囲はA、B類と同じく、



第 8 図 類型別の出土量比分布図②

妻沼低地から大宮台地北部に分布し、武蔵野台地に位置する中橋場遺跡でも確認できた。1 遺跡あたりの出土量は、高井東遺跡と諏訪木遺跡が多い傾向にあり、両遺跡は、A 類から継続して拠点的な集落であった可能性がある。

一括資料では、高井東遺跡第 10A 号住居跡において出土している (第 11 図—10 ~ 19)。住居跡の帰属時期は、安行 3b 式から安行 3c 式古

第 9 図 類型別の出土量比分布図③

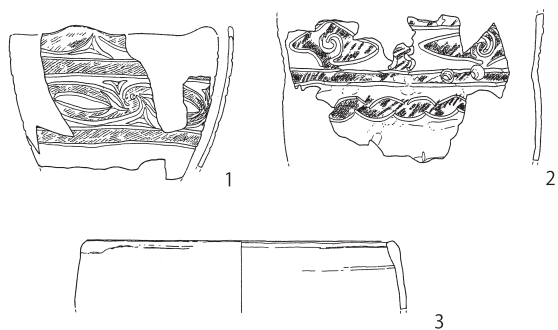
段階に位置づけられる。出土した「有段口縁」の粗製土器は、小破片であるが、諏訪木遺跡第 1 号住居跡と同じようにある程度のバリエーションが認められる。17 は、調整等は不明であるが、口縁部断面形態が極端に突出した形態を呈しており、C 類の様相とも一致する。

#### ④ D 類の分布傾向と検討 (第 7 図—④)

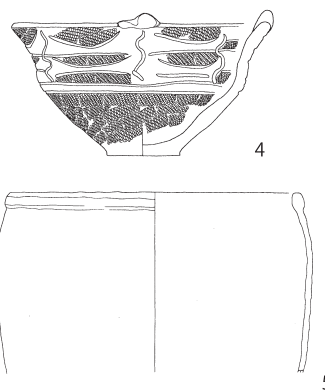
D 類は、16 遺跡 47 個体の確認ができた。分布範囲は、妻沼低地から大宮台地北部を中心に分布し、長竹遺跡、諏訪木遺跡、赤城遺跡、後谷遺跡の位置する狭い範囲内に 1 遺跡あたりの出土量は多い傾向にある。1 遺跡あたりの出土量は、少数であるが、天神原遺跡や中栗須滝川Ⅱ遺跡などの藤岡周辺地域や渡良瀬川流域の千網谷戸遺跡など中心地から離れた遺跡からも出土している。

一括資料では、安行 3b 式から安行 3c 式古段階に相当する本遺跡第 5 号住居跡において確認できた (第 11 図—25 ~ 32)。30 と 32 は小片であるが、有段部の突出が若干の折り返す様相が確認できる。この様相については、諏訪木遺跡においても確認することができ、本遺跡以外の事例でも確認できることから同じ様相を持った土器が

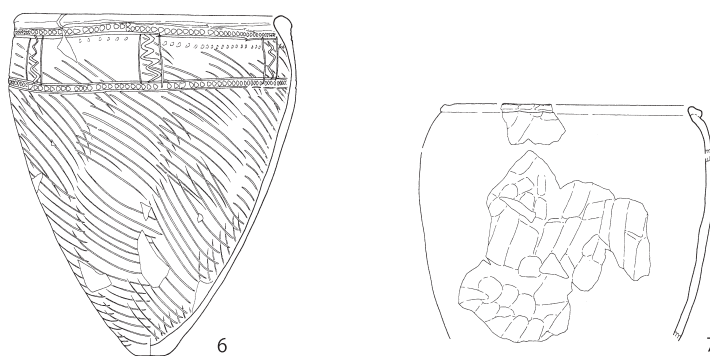
中栗須滝川Ⅱ遺跡 17号住居跡 (1~3)



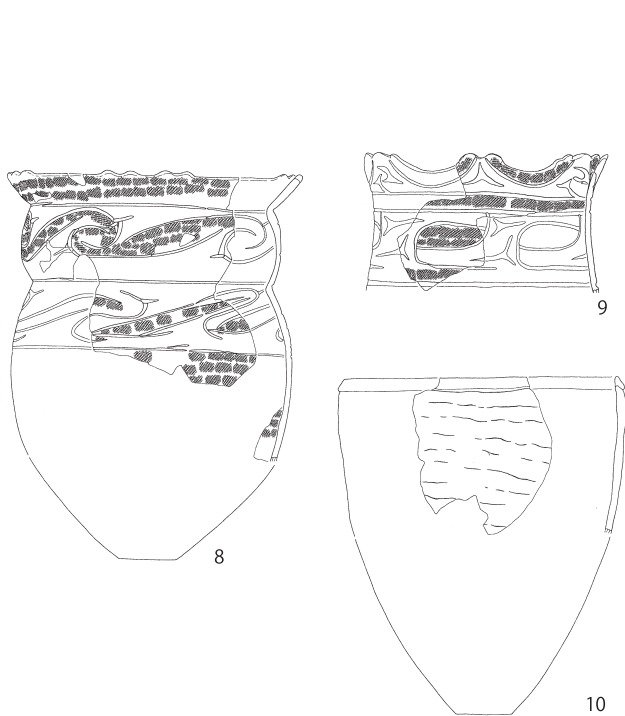
高井東遺跡 17号住居跡 (4,5)



宮岡氷川神社遺跡第1号住居跡 (6,7)



新屋敷東遺跡第5号住居跡 (8~10)



寿能泥炭層遺跡 J-6 グリッド (11~14)

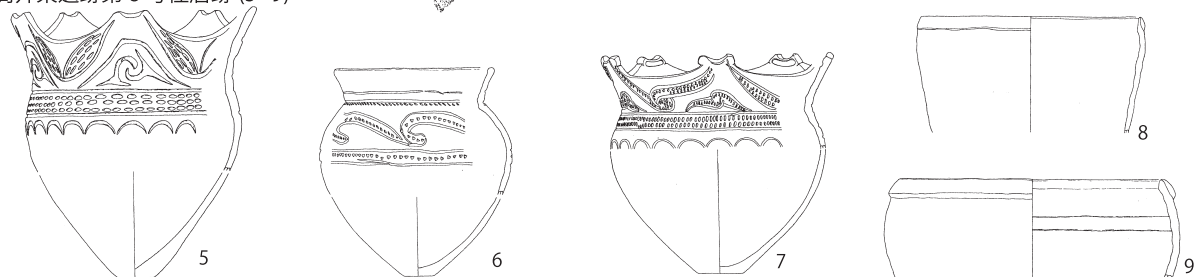


第10図 「有段口縁」粗製土器集成図③ (1/8)

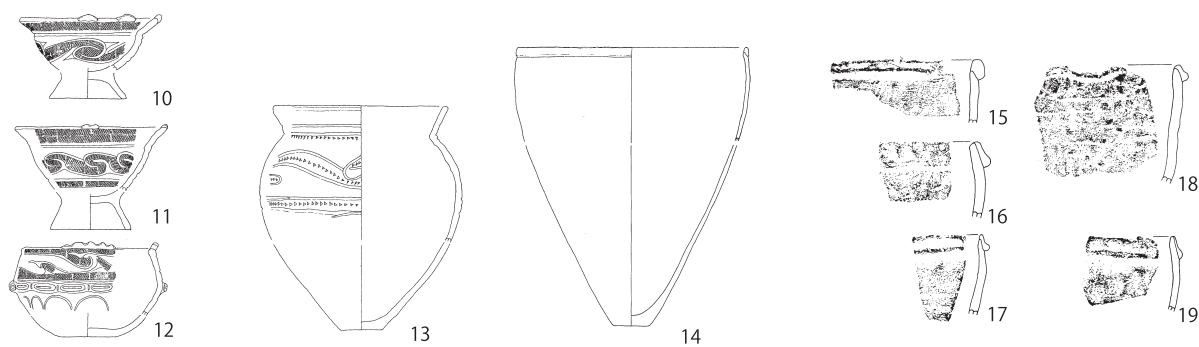
東北原遺跡第2号住居跡(1~4)



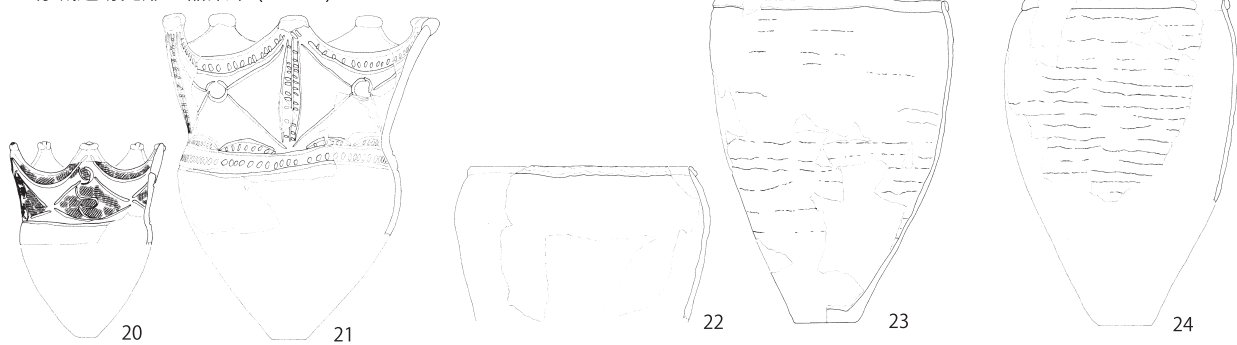
高井東遺跡第8号住居跡(5~9)



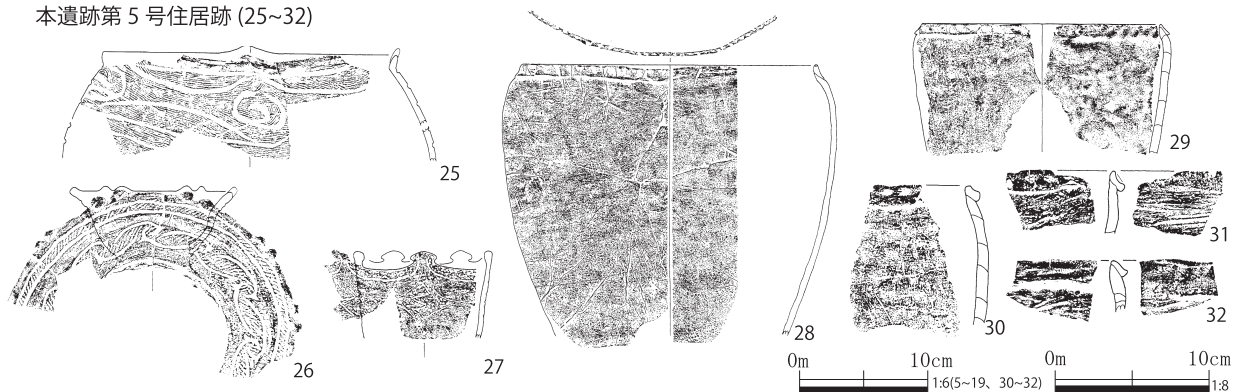
高井東遺跡第10A号住居跡(10~19)



赤城遺跡完形土器集中(20~24)

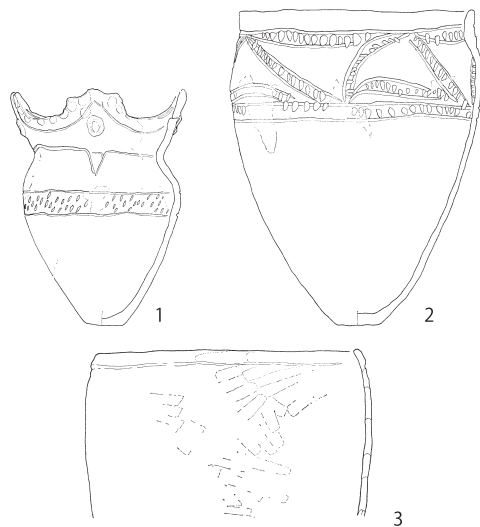


本遺跡第5号住居跡(25~32)

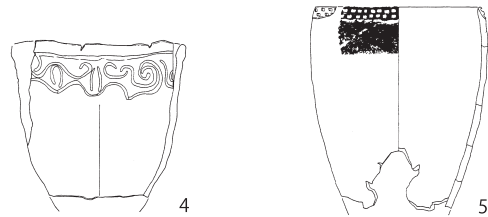


第11図 「有段口縁」粗製土器集成図④ (1/6、1/8)

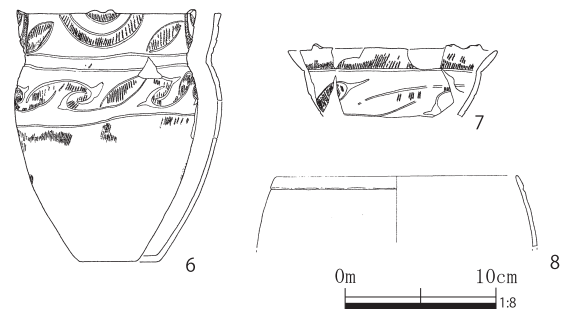
寿能泥炭層遺跡 I-5 グリッド (1~3)



安通・洞遺跡埋甕 (4,5)



シモ田遺跡 ID-8 遺構 (6~8)



第 12 図 「有段口縁」粗製土器集成図⑤ (1/8)

分布していたと考えられる。

#### ⑤ E 類の分布傾向と検討 (第 8 図—⑤)

E 類は、35 遺跡 156 個体の確認ができた。分布範囲は、4 地域に特徴的な傾向が認められた。

1 つ目は、A から D 類まで中心的位置にあった妻沼低地から大宮台地北部を中心とする地域である。新屋敷東遺跡や諏訪木遺跡、後谷遺跡では、1 遺跡あたりの出土数が全体の中でも非常に多い点である。2 つ目は、長竹遺跡や板倉遺跡などが位置する埋没台地の地域である。この地域も先に述べた地域と同様に A から D まで中心的地域である。続いて E 類以降増加する地域として、鐙川流域から北武蔵台地、秩父山地と渡良瀬川流域で、これらの地域は E 類以降を多くなる傾向にある。秩父山地では加能里遺跡 (第 1 図—2) が挙げられる。

一括資料での出土事例は、安行 3b 式期の東北原遺跡第 1 号住居跡 (第 11 図—1~4) や安行 3b 式から安行 3c 式古段階に相当する赤城遺跡完形土器出土地点 (第 11—20~24) などが挙げられる。これらの資料は、口縁部に有段が形成されるが、まだ肥厚した状態で、諏訪木遺跡の E 類と共通している。

#### ⑥ F 類の分布傾向と検討 (第 8 図—⑥)

F 類は 54 遺跡 754 個体で、対象地域のほぼ全域で確認することができた。分布傾向は、秩父山地や新沼低地、板倉地域、大宮台地北部を中心に分布し、E 類と同様の傾向がみられる。

一方で、E 類以降分布が認められた藤岡台地や渡良瀬川流域にも分布が認められ、瀧沢石器時代遺跡や矢瀬遺跡などの利根川上流域においても分布が確認される。E 類出土量は、秩父山地から妻沼低地が最も多く、それに次いで板倉周辺地域や大宮台地北部に多くみられる。

また利根川上流域や渡良瀬川流域でも瀧沢石器時代遺跡において 68 個体確認でき、新治村役場遺跡や千網谷戸遺跡でも多く確認できる遺跡もみられるが、妻沼低地より分布が疎らである。

一括資料では、安行 3b 式から安行 3c 式期に帰属する高井東遺跡第 8 号住居跡 (第 11 図—8、9) や本遺跡第 5 号住居跡 (第 11 図—28、29)、安行 3c 式中段階に帰属する寿能泥炭層遺跡 I-5 グリッド (第 12 図—3)、天神原式期に帰属する安通・洞遺跡 (第 12 図—5)、シモ田遺跡 (第 12 図—8) で確認できた。安行 3b から安行 3c 式の高井東遺跡 8 号住居跡や本遺跡第 5 号住居跡

では、有段部が他のF類と比較すると若干肥厚がみられる。3のように安行3c式中段階では、確実に平坦になる様相が認められた。

#### ⑦ G類の分布傾向と検討(第9図—⑦)

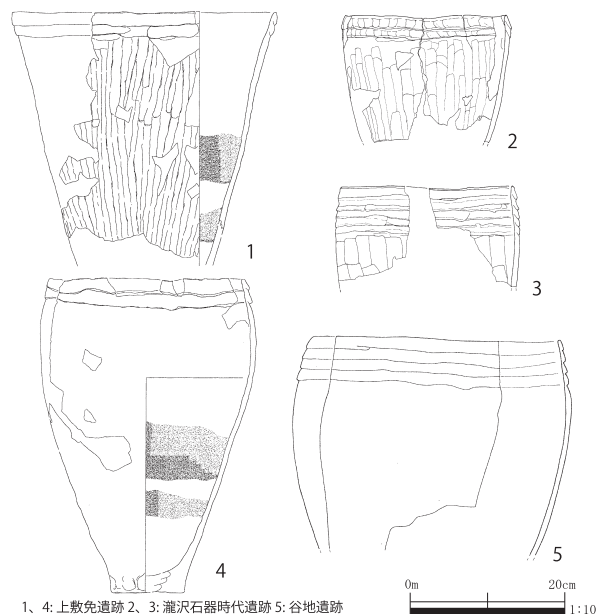
G類は、27遺跡314個体の確認ができた。分布傾向は、E類が対象地域のほぼ全域に確認できたのに対して、G類は利根川流域と渡良瀬川流域、藤岡台地、妻沼低地、板倉周辺に分布がとどまり、大宮台地では確認できない傾向がある。出土量に関しても、E類とは異なり、上記に示した地域でほぼ同量の出土が認められ、妻沼低地や利根川流域に集中している。

一括資料では、古宮遺跡以外で確認することができなかった。特徴として、有段部が2段のもの(第13図—1・2・4)が主体を占め、第13図—3と5のような多段になるものもみられる。胴部調整は、縦方向の撫で調整が中心である(第13図—1～3)。古宮遺跡の共伴遺物から時期は、天神原式新段階ないし、安行3c式新段階には、有段部が2段化するとみられる。

以上のように本章では、AからG類の検討を行ってきた。その結果、A類からC類では妻沼低地から大宮台地北部に分布し、D類で渡良瀬川流域や藤岡台地などに新たな分布がみられた。さらにF類になると対象地域全体に広がり、G類では、大宮台地北部で認められないという特徴が明らかになった。

一括資料をもとにした時間軸の検討では、A類は安行3a式には見られ、時期が遡る可能性も考えられる。B類からD類に関しては、安行3b式、E類は安行3b式から安行3c式の一括資料で確認できた。続いてF類は安行3c式中段階、G類は安行3c式新段階に成立したと考えられる。

まとめると、「有段口縁」の粗製土器の変遷は、AからF・G類へと変遷し、F類とG類に関しては、同時並行で変遷が想定される。



1、4: 上敷免遺跡 2、3: 瀬沢石器時代遺跡 5: 谷地遺跡  
第13図 「有段口縁」粗製土器集成図⑥(1/10)

#### 結語

本稿では、従来から天神原併行の粗製土器とされてきた「有段口縁」の粗製土器を諏訪木遺跡と古宮遺跡の出土資料にもとづいて、変遷を組み、類型化を行った。その結果、「有段口縁」の粗製土器の出現は、安行3a式には成立し、安行2式以前まで遡る可能性が考えられた。

有段部の変遷過程については、A類とB類は安行3a式、C類からD類までが安行3b式、E類が安行3b式から3c式、F類とG類が安行3c式以降と考えられ、各類型に関してさらなる検討が必要であるが、鈴木や設楽が述べた口縁部断面形態が肥厚するものが平坦化するという見解を追認することができた。そして詳細な時間的変遷を明らかにすることができた。F類は、安行3c式の中段階には成立したと考えられ、安行3c式を成立時期とした鈴木正博や鈴木加津子などの見解と一致する。

分布に関しては、新屋雅明が群馬県北部から東京湾西岸に分布し、天神原式の精製土器とは異なった分布することを指摘しており、本稿でも追認することができた(註3)。類型ごとの分布傾向は、A類は妻沼低地や大宮台地北部を中心とし

て、藤岡台地などにも散逸的に認められた。B類からC類は妻沼低地から大宮台地北部に分布が限られた。D類は、C類同様の傾向がみられるが、千網谷戸遺跡においても確認でき、E類になると分布範囲が拡大し、渡良瀬川上流域や秩父山地においても確認できる。安行3c式としたF類とG類は、F類がG類の分布範囲を継続しさらに分布範囲を拡大する。一方でG類は利根川上流から中流域、妻沼低地を中心とした分布がみられる。

これらの分布傾向から、安行3a式期に妻沼低地から大宮台地北部に成立した「有段口縁」の粗製土器は、徐々に分布を広げ、安行3c式以降に天神原式の中心地である群馬県へと分布が拡大したと考えられるため、天神原式併行の粗製土器として成立していない可能性が考えられる。

その理由として、群馬県域において「有段口縁」の粗製土器は、妻沼低地から大宮台地北部よりも分布及び出土量が少ないこと、安行3b式に並行させたD類の段階まで先の地域に中心的に分布すること、諏訪木遺跡や高井東遺跡において、継続的に各類型が認められること、天神原式精製土器が出土していない遺跡においても確認できることが挙げられる。

以上のことから「有段口縁」の粗製土器は、妻沼低地から大宮台地北部を中心として分布していた無文粗製土器の一種が他地域などの影響によって変化し、有段部に何らかの表示性が備わったと考えた。ここで取り上げた表示性に関しては、集落または集団を表示したもの、生業面の役割などが考えられる。「有段口縁」の粗製土器を観察すると第2図—17や第13図—4のように器形や形態が規格的で、斉一的であることが挙げられる。そのため表示性に関しては、生業面も考えられるが、あえて有段部を設ける必要性はないと推測される。そのため有段部を設けることによって、「有段口縁」の粗製土器の製作者が、集落または集団などを表したと考えられる。

また有段部は、製作途中の土器や製作工程上の省略の可能性はないと考える。その理由としては、各類型においてある程度の出土量及び限られた地域に分布することが挙げられる。

では、なぜ有段部に表示性が生じたのか。私はその要因として、安行3b式以降にみられる大洞式土器製作者などとの影響関係の増大が背景にあると考えた。その影響関係によって、大洞式土器製作者は、在地土器製作者に対して影響を与え、地域または集団における表示性などの再構成を図ったと想定した。そして最も日常的な土器であった無文粗製土器は、影響を受けやすかったため、有段部が備わり、分布の拡大や一地域における多段化などが生じたと考えられる。しかし、本稿では成立背景について検討不十分なため、今後改めて検討したい。

同時期には、同じく粗製土器に一種である紐線文系土器も大宮台地において、条線施文が無文化し、副文様帯文様が発達する。両系統の関係は、有段口縁粗製土器の有段部の施文（第1図—1）や形態など紐線文系土器との密接な関係が想定され、ともに影響を受けやすかったと考えられる。

そして本稿では扱わなかったが、晩期中葉以降の有段口縁粗製土器は、南奥地方では網目状撚糸文、群馬県域周辺では撚糸文を地文とした有段口縁粗製土器が出現する傾向が認められる。さらに分布範囲も変化する。この現状は、大洞式土器製作者との影響関係によって生じた「有段口縁」の粗製土器の表示性が地域または集団ごとに強調化されたためと考えられ、「有段口縁」の粗製土器を粗製土器として捉えること自体を検討する必要がある。

今後の課題としては、まず今回は時間の都合上、各類型における検討が不十分であったため、各類型の検討及び、他系統土器との関係を検討し、「有段口縁」の粗製土器の位置づけを行う。2つ目には、今回対象地域とした以外の地域での他地域と

の関係を検討する。3つ目に成立期と安行3c式以降における動向の検討を行う。以上の課題から土器製作者および相互の関係性について考えていきたい。

## 謝辞

本稿作成にあたり、ご指導いただいた秋田かな子先生、古谷渉氏には深く感謝申し上げます。

## 註

註1 大学院生時に、諏訪木遺跡と古宮遺跡出土資料の実見、さらに長竹遺跡における整理作業に従事した際の知見も参考になった。

註2 第1図—1の有段部に認められる方形の刺突は、乙女不動原北浦遺跡や寺野東遺跡の紐線文系土器にも確認でき、鬼怒川流域の紐線文系土器との関係性が考えられる。

註3 東京湾西岸では、E類が下宅部遺跡や下布田遺跡などの多摩川流域を中心に確認でき、今後検討する。

## 引用・参考文献

- 秋田かな子 2005 「堀之内2式期“加熱系土器”製作の一断面—関東西部における“表示性希薄土器”の存在形態—」『土曜考古』第29号 土曜考古学研究会
- 青木義脩他 1982 『馬場小室山遺跡』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第1集 浦和市教育委員会
- 青木義脩他 1983 『馬場小室山遺跡 第5次』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第3集 浦和市教育委員会
- 新屋雅明 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集 財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団
- 新屋雅明 1991 「大宮台地における晩期時代後期末から晩期初頭の土器群について」『埼玉県考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 新屋雅明 1993 「大宮台地出土資料を中心とした安行式土器の編年」『縄文時代後・晩期安行文化シンポジウム 発表要旨・付図』埼玉考古学会「土偶とその情報」研究会
- 新屋雅明 1996 「埼玉地方の安行3c式」『埼玉地域文化の研究 下津弘・塚越哲也君追悼論文集』
- 新屋雅明 2008 「晩期安行式土器」『総覧 縄文土器』(株)アム・プロモーション
- 新屋雅明 2007 『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第339集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 新屋雅明 2015 『縄文時代後・晩期土器編年研究—加曾利B式～安行式土器群の変遷—』(株)六一書房
- 赤熊浩一他 2014 『長竹遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第413集 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 飯田陽一 1998 『行沢大竹遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第237号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石北直樹 1996 『糸井太夫遺跡』昭和村埋蔵文化財調査報告書第6集 昭和村教育委員会
- 市川 修 1974 『高井東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
- 井上 蒙 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編』埼玉県立博物館
- 猪瀬美奈子 2004 「北関東における晩期中葉の様相」『第17回縄文セミナー—晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 岩崎泰一他 2009 『大道東遺跡(1)—縄文時代編—』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第464集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 上野真由美他 2005 『雅楽谷遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第307集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 奥野麦生 2010 『入耕地遺跡—第1・3地点』白岡町遺跡調査会調査報告書第9集 白岡町遺跡調査会
- 奥野麦生 2012 『入耕地遺跡—第4・7地点』白岡町遺跡調査会調査報告書第10集 白岡町遺跡調査会
- 奥野麦生 2007 『入耕地遺跡—第5・6地点』白岡町埋蔵文化財調査報告書第16集 白岡町遺跡調査会

- 小澤 守 2004 『町内遺跡発掘調査 5 秩父・大滝遺跡 2000』秩父郡長瀬町教育委員会
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』(株)同成社
- 大塚達朗 2005 「紐線紋土器と粗製土器」『アカデミア 人文・社会科学編』第 80 号 南山大学
- 大谷 徹 2014 『諏訪北Ⅰ／諏訪北Ⅱ／諏訪南／二ツ家下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 409 集  
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 壁 伸明 2008 『高梨子地区遺跡群発掘調査報告書』安中市教育委員会
- 金子直行他 2006 『中野遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 322 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 川崎義雄他 1969 『奈良瀬戸遺跡』大宮市教育委員会
- 川島正一 1991 『矢島遺跡』明和村教育委員会
- 川島正一 1995 『矢島遺跡河川敷部分試掘調査報告書』明和村教育委員会
- 川島正一 1999 『矢島遺跡東地区発掘調査報告書』明和村教育委員会
- 川道 享 2011 『釜ノ口遺跡 3』伊勢崎市文化財調査報告書第 100 集 伊勢崎市教育委員会
- 木戸春夫 2000 『上敷免北遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査報告書第 248 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 木戸春夫他 2012 『皿沼西／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第 391 集 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂禎二 2002 『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第 283 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 熊澤孝之 2011 『加能里遺跡第 36 次調査ほか岩沢北部土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』飯能市遺跡調査会
- 小島純一 1981 『稲荷山 KⅠ・安通、洞 A3』群馬県勢多郡粕川村教育委員会
- 小林茂他 1995 『下平遺跡 秩父・合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』合角ダム水没地域総合調査会
- 小林 修 2008 『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅰ・Ⅱ』渋川市教育委員会
- 古郡真志 1986 『F<sub>2</sub> 緑埜地区遺跡群Ⅰ』藤岡市教育委員会
- 近藤義郎 1950 「群馬縣川内村千網皆戸の一遺跡」『両毛古代文化』第 2 集 両毛考古学会
- 斎藤成元 2008 『宮岡氷川神社前遺跡 第 3 次調査』北本市埋蔵文化財調査報告書第 16 集
- 斎藤利明 2007 『吹屋遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 405 集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 斎田智彦 2008 『菅塩遺跡群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 451 集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 設楽博己 1984 「前橋市上沖町西新井遺跡の表面採集資料(上)」『群馬考古学通信』第 9 号 群馬県考古学談話会
- 設楽博己 2000 「縄文晩期の東西交渉」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文刊行会
- 茂木努他 2002 『中栗須滝川Ⅱ遺跡—縄文時代集落編—』藤岡市教育委員会
- 鈴木加津子 1994 「安行式文化の終焉(四・完結編)」『古代』第 95 号 早稲田大学考古学会
- 鈴木加津子・鈴木正博 1982 「安行 3 b 式研究の序」『土曜考古』第 5 号 土曜考古学研究会
- 鈴木加津子・鈴木正博 1983 「安行式遺蹟改題(1)」『土曜考古』第 7 号 土曜考古学研究会
- 鈴木加津子・鈴木正博他 1989 「正綱遺跡—荒川右岸における縄文時代後晩期遺跡の研究—」『富士見市研究紀要』第 5 号 富士見市遺跡調査会
- 鈴木正博 2007 「馬場小室山遺蹟の「窪地」から後谷遺蹟の「窪地文化層」へ—大宮台地における晩期中葉「安行 3 d 式」生活様式の一様相—」『菟玖波—川井正一・斎藤弘道・斎藤正好先生還暦記念論文集』川井・斎藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会
- 鈴木孝之 2004 『古宮／中条条里／上河原』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 298 集 財団法人埼

玉県埋蔵文化財調査事業団

- 鈴木敏昭他 1978 『東谷・前山 2 号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第 16 集 埼玉県教育委員会
- 鈴木徳雄 1997 『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』 児玉町文化財調査報告書第 26 集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 2007 『児玉清水遺跡Ⅱ—B 地点の調査—』 本庄市遺跡調査会第 19 集 本庄市遺跡調査会
- 曾根原裕明他 1986 『飯能の遺跡 (5) 中橋場遺跡』 飯能市教育委員会
- 曾根原裕明他 1989 『飯能の遺跡 (8) 加能里遺跡第 8・9 次調査』 飯能市教育委員会
- 藺田芳雄 1956 『北米岡遺跡』 群馬県立伊勢崎女子高等学校地歴部
- 藺田芳雄 1961a 「北関東における縄文式晩期の文化 (Ⅰ)」『県立富士国立公園博物館研究報告』第 5 号 県立富士国立公園博物館
- 藺田芳雄 1961b 「北関東における縄文式晩期の文化 (Ⅱ)」『富士国立公園博物館研究報告』第 6 号 県立富士国立公園博物館
- 藺田芳雄 1972 『千網谷戸 CE-S 地点の調査』
- 大工原豊 1994 『中野谷遺跡群』 安中市教育委員会
- 大工原豊他 2014 『西新井遺跡第 4 地点』 有限会社毛野考古学研究所
- 高島英之 2006 『小野地区水田址遺跡 (社宮司 B 地点) 谷地遺跡 F 地点』 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 378 集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高島英之 2010 『楽前遺跡 (2)』 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 502 集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高村敏則 1994 『橋屋遺跡』 花園町教育委員会文化財報告第 1 集 花園町教育委員会
- 鷹野光行 1990 「安行 3 c 式土器の 3 分について」『先史考古学研究』第 3 号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 瀧瀬芳之他 1993 『上敷免遺跡 (第 1 分冊)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 128 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田部井功他 1979 『後谷遺跡』 後谷遺跡発掘調査会
- 田部井功他 1981 『後谷遺跡—市道拡幅工事に伴う第 3 次発掘調査』 桶川市文化財調査報告書第 14 集
- 田中和之他 2009 『久台遺跡—第 9 次調査地点—』 蓮田市教育委員会
- 田中広明他 1992 『新屋敷東・本郷前東』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 111 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塚田光・柴崎孝・戸田哲也 1970 「群馬県・新治村「役場遺跡」と出土遺物について」『考古学雑誌』第 56 巻第 1 号 日本考古学会
- 寺内正明 1987 『ささら遺跡』 蓮田市文化財調査報告書第 9 集 蓮田市教育委員会
- 外山和夫他 1989 『板倉町史基礎資料第 39 号 板倉町史考古資料編別巻 9 板倉町の遺跡と遺物』 板倉町教育委員会
- 中村和夫他 2013 『地獄田遺跡』 久喜市埋蔵文化財調査報告書第 1 集 久喜市教育委員会
- 並木勝洋 2013 『安通・洞 No. 2 遺跡』 前橋市教育委員会
- 橋本 勉 1985 『ささら (Ⅱ)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 47 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本 勉 1990 『雅楽谷遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 93 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 林 克彦 1994 「天神原遺跡の後・晩期の土器群について」『中野谷遺跡群』 安中市教育委員会
- 林 克彦 1996 「「天神原式」土器の研究 (1)」『青山考古』第 13 号 青山考古学会
- 林 克彦 1997 「「天神原式」土器の研究 (2)」『青山考古』第 14 号 青山考古学会
- 林 克彦 2000 「「天神原式」土器の研究 (3)」『青山考古』第 17 号 青山考古学会
- 林 克彦 2008 「天神原式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 三宅敦気 2005 『上組北部遺跡群Ⅱ 矢瀬遺跡』 月夜野町教育委員会

- 古郡正志他 1982 『C4 小野地区遺跡群』群馬県藤岡市教育委員会
- 藤巻幸男 1985 『荒砥前原遺跡・赤石城址』群馬県教育委員会
- 藤沼昌泰他 2004 『後谷遺跡 第4次・第5次発掘調査報告書(第1分冊)』桶川市教育委員会
- 藤沼昌泰他 2005 『後谷遺跡 第4次発掘調査報告書(第2分冊)』桶川市教育委員会
- 藤沼昌泰他 2007 『後谷遺跡 第4次発掘調査報告書(第3分冊)』桶川市教育委員会
- 細田勝他 1994 『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 前原豊他 1988 『C7 神明北遺跡・C 8 谷地遺跡』藤岡市教育委員会
- 増田 修 1977 『千網谷戸遺跡発掘調査概報』桐生市文化財報告書第2集 桐生市教育委員会
- 増田 修他 1978 『千網谷戸遺跡』桐生市文化財調査報告第3集 桐生市教育委員会
- 増田 修 1999 『千網谷戸遺跡'91 発掘調査概報』桐生市文化財調査報告第14集 桐生市教育委員会
- 三田村美彦 1971 「小深作遺跡」大宮市文化財調査報告第3集 大宮市教育委員会
- 村田章人 1984 『赤羽・伊那屋敷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第31集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村田章人 1993 『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第137集 財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団
- 村山 卓 2016 『大平遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第424集 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 三宅敦気 1999 『新治村役場遺跡』新治村教育委員会
- 宮田裕紀枝 1995 『本遺跡』板倉町教育委員会
- 元井 茂 1983 『赤城遺跡』川里村教育委員会
- 矢内 勲 1999 『平遺跡発掘調査報告書—F 地点の調査—』神泉村教育委員会文化財調査報告書第2集 神泉村教育委員会
- 柳田博之他 2016 『馬場小室山遺跡(第32次)』さいたま市遺跡調査会報告書第163集 さいたま市遺跡調査会
- 山形洋一他 1985 『東北原遺跡—第6次調査—』大宮市遺跡調査会報告別冊1 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一他 1997 『市内遺跡調査報告 東北原遺跡—第11次調査—』大宮市文化財調査報告第43集 大宮市教育委員会
- 湯原勝美 1999 『八木連西久保・行沢大竹・行沢竹松・諸戸スサキ遺跡』妙義町教育委員会
- 柳田博之 2015 『氷川神社遺跡』さいたま市遺跡調査会報告書第162集 さいたま市遺跡調査会
- 柳戸信吾 1997 『飯能の遺跡(21) 加能里遺跡第27次調査』飯能市内遺跡群発掘調査報告書第13集 飯能市教育委員会
- 山田仁和 2003 「関東地方北部における縄文時代晩期中葉土器群について」『栃木県考古学会誌』第24集 栃木県考古学会
- 山内清男 1964 「縄文式土器・総論」『日本原始美術第1巻 縄文時代』講談社
- 吉川國男 1972 『北本市の埋蔵文化財』北本市文化財調査報告書第1集 北本市教育委員会
- 渡辺清志 2007 『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊美里 2007 『釜ノ口遺跡Ⅳ』伊勢崎市文化財調査報告書第81集 伊勢崎市教育委員会

## 図版出典

第1図：原ヶ谷戸遺跡(村田1993)、板倉遺跡(外山他1989)、加能里遺跡(熊澤2011)、千網谷戸遺跡(増田他1978)を引用・改変。第2図：諏訪木遺跡(渡辺2007)、古宮遺跡(鈴木2004)を引用・改変。第3図：古宮遺跡(鈴木2004)を引用・改変。第4図：諏訪木遺跡(渡辺2007)をトレース作成。第5図から第9図：筆者作成。第10図：新屋敷東遺跡(田中他1992)、寿能泥炭層遺跡(井上1984)、高井東遺跡(市川他1978)、中栗須滝川Ⅱ遺跡(茂木他2002)、宮岡氷川神社遺跡(斎藤他2008)を引用・改変。第11図：赤城遺跡(新屋1988)、高井東遺跡(市川他1978)、東北原遺跡(山形他1985)、本遺跡(宮田他1995)引用・改変。第12図：安通・洞遺跡(小島1981)、シモ田遺跡(古郡1986)、寿能泥炭層遺跡(井上1984)を引用・改変。第13図：上敷免遺跡(瀧瀬1993)、瀧沢石器時代遺跡(小林2008)、谷地遺跡(前原他1986)から引用・改変。